第47号 崋山会報

令和3年11月11日

公益財団法人崋山会

秋葉街道が結んだ画系

飯田市美術館副館長補佐 槇村洋介

遠州から信州へと向かう秋葉街道を北上し、信濃境の青崩峠を越え、さらに遠山谷から小川路峠を越えると天竜川中流の伊那谷に至る。三遠南信自動車道が整備され始めているとはいえ、信州へと向かう道筋は秘境感が漂う。地図上では国道が走るが、峠付近は車道が途切れてしまう。「幻の国道」とか「酷道」と呼ばれ、好奇心に駆られて訪れる人はいるものの、日常的に往来する人はほとんどいない。しかし、百年ほど前には、この道は東海道から伊那谷へ抜ける主要な道のひとつであり、三河・遠江地方と伊那谷は今以上に交流が盛んだった。

小川路峠を越えて伊那谷に入ったところに野池という村がある。今は飯田市の一部になっているこの地に、明治から昭和初めにかけて活躍した大平小洲という南画家がいた。彼が生まれた大平家は近郷に知られた名主の家である。飯田で愛された南画家・佐竹蓬平の名作を所蔵し、放浪の南画家・原蓬山が逗留し筆を揮った。また、小洲の父親は京都の岡本豊彦に画の手ほどきを受けたという。そのような環境に育った小洲は、画の師を豊橋の渡辺小華に求めた。秋葉街道は子弟を結ぶ架け橋であった。

小洲は、崋山―椿山―小華の花鳥画の系譜を引き継いだ画家である。「飯田に小洲のない家はない」と言われるくらい多くの作品が残っているが、その九割近くが花鳥画である。崋椿系の花鳥画は、惲南田や張秋谷といった清朝の花鳥画を手本にしながら濃彩を避け、宋代に倣った清明で品位のある花鳥画を描いた。小洲の花鳥画は、明治・大正・昭和の気風を帯びてやや華やぎが加わるが、絢爛なものにならず穏やかさを残す。

小洲の作品に渡辺崋山の《湖石白猫図》(田原市博物館蔵)を模倣した《巌下睡猫図》がある。白猫、太湖石、雀と画面構成はほぼ同じで、崋山がタンポポを添えるのに対し、小洲は牡丹を添える。崋山の作品は、枯れた筆遣いで簡素ながら荒々しい作風をみせ、鎖国下の日本に海外列強が忍び寄る世相を暗示するという。小洲の作品は、伸びやかで優しい絵づくりで、養蚕景気に沸いた当時の伊那谷の平和な空気をかもし出す。同画題ながら時代も場所も代わり、受ける印象は異なるが、画系はつながっている。

伊那谷の所蔵家を訪れると、しばしば小華の作品にも出会う。秋葉街道を越えてはるばる山国にたどり着いたのかもしれない。三河と伊那谷、険しい山道を歩き進んだ時代、今以上にふたつの地の芸術文化は結ばれていた。

大平小洲「巌下睡猫図」

「湖石白猫図」

『全楽堂記伝』（六）

―崋山伝記の根底テキスト―

研究会員　別所興一

　父の病身のゆえに長崎留学を断念した崋山は、その後も大病をわずらった父の看病に明け暮れた。四十六歳の今日まで艱難辛苦の日々ばかり過ごしてきたので、遂に難治の病身になってしまった。

　こんな生活の連続のため、私の母は抜群の苦労を重ねてきたが、この母の老後を養うのは、私以外にない。それなのに一昨年以来、私自身が疲労困憊（こんぱい）しているので、不慮の病でも起こらぬかと心配である。特に昨年、末弟五郎（崋山は近い日に渡辺家の家督を相続させたいと想定していた）が早世して以来、その心配が深まった。万一母より先に私が病没するようなことになったら、死んでも魂は浮かばれない。それ故、せめて藩の重職を免除していただき、一年だけでも老母の保養につとめたい、と哀願・泣訴した上で、崋山は次のように追記している。

「其上右之仕合（しあわせ）故、何ひとつ御政事之御裨益ニ可相勤道筋心得不申、重キ御役ニ尸位（しい）罷在、恐怖至極ニ御座候。乍去（さりながら）、其義ハ御勘弁をも賜り候而も御大政扶持可仕、学文出来不申、是迄心得候義ハ、画事内食計（ばかり）ニ御座候。たとえ憤発仕候とも、日暮道遠く、其上病身相成、致方無之候」

　何一つ政治に役立つような心得を身につけられないまま、藩の年寄職（家老）という重職を汚（けが）し、身の程知らずであることが、大変恐ろしくなります。しかし、その件はお許しいただきましても、大切な政治の助けになるような学識には達していません。私が身につけたことと言えば、画を描いて内職することだけです。

　たとえここで一念発起して学問を志しても、日暮れて道遠し、といったありさまの上に、病身となった今では、どうしようもありません。

　崋山はこのように弁明した後、画作（画道）と政治（治道）のあり方について、次のように論じている。

　「一、唯絵事にて推謀（おしはか）り存候に、画事すら第一の心と申ものニ、志一途ニ立不申候而ハ、物之形の調（ととの）ヒ候而、落なく見事ニハ出来不申候。又心ばかりやたけに存込候とて、手も又心之通ニ動き不申候ては画なり不申候。又心、手計自由ニ相成候とて、それにて画出来候と申ニハ参り不申、胴体四肢治り不申候而ハ、机ニ向ひ腹より溢（あふ）れ出候様ニ存込不申候而ハ出来不申候。依之惣身之内、髪の先爪の端迄、皆画ニ相成候様仕（つかまつる）事にて候」

　唯、画作により政治を推しはかると、画作の場合ですら、第一の心がけとするのは、心を一つの目的に集中することです。そうでないと、物の形が整わず、手落ちなく見事な作品に仕上げることはできません。

　また、心ばかり勇み立っても、手が心の命ずる通りに動かなければ、画を描くことはできません。心や手が自由になったからと言って、それだけで画が出来上がると申すことも

目次

題字「崋山会報」元崋山会理事　故小澤耕一氏
P① 秋葉街道が結んだ画系　槇村洋介
P② 全楽堂記伝（六）別所興一
P⑥ 遺像を描く　鈴木まりな
P⑩ 四州真景の旅 ⑩　中神昌秀
P⑫ 少年物語渡辺崋山　読書感想文
P⑯ 公益財団法人崋山会　田原市博物館からご案内

できません。

心が胴体・四肢を支配しないようでは、また机に向かって腹から力があふれ出るように自覚できなくては、画は出来上がりません。つまり、全身のうち、髪の先、爪の端まで、みな画を描こうという気持ちになってこそ、画は出来上がるのです。

要するに、内なる心は勿論、手足腹背爪髪までも総動員して、全力を尽くさなければ、真の画は描けない、と崋山は力説したのである。

その後段で、崋山は政治（治道）のあり方、為政者の基本姿勢について、次のように解説している。

「今の諸侯如何にや。諸侯にして国ヲ不治シテ、家中、百姓ニ出精致せと令シ候とて、服従可仕もの可有之哉。又奉行にして奉行丈の事を尽不申シテ、百姓、百姓丈を尽シ可申とて令候而も、猶更承知不仕候。……又四民ニ分チ申セバ、士ハ三民を治候職ニ御座候故、御家中誰彼となく、治安ニ心を用ひ候ハねバ、跡の三民ハ治不申候。然ラバ、上よりして下足軽に至ル迄、治安ニ志無之候而ハ、何事も出来不申」

諸侯でありながら国をきちんと治めないで、藩士や百姓に熱心に励め、と命令しても、これに従う者がいるでしょうか。また奉行でありながら、奉行の本務を果たさないで、百姓に対してその本分を尽くせと命令しても、なおさら承服しないでしょう。……士農工商の四つの身分に分けて申せば、武士は三民を統治する職分ですから、藩士たる者は誰であろうと、藩の治安に尽力しなければ、三民は承服しません。要するに、上は殿様から下は足軽に至るまで、一致結束して藩の治安に尽力する気持ちがなければ、何事も成就しません。

崋山は「画道も治道も、道理は一つで、異なるものではない」という視点から、さらに藩政のあるべき基本姿勢について、次のように解説している。

「御家中、中間（足軽より格下の雑役に従事した奉公人）に至るまで、何卒上を奉存上候様相成候時ハ、前に申、惣身皆画ニ相成候故、病身ものハ病身だけ之義も出来可申、又病身とて惣身之内ニ付、剪て逃られも不仕候。或ハ右申様ニ中間迄も左様ニ残ナク、上奉存上候様ニハ不相成と被仰候半が、水を引ものハ源を不濁と申通、いかやうなる至愚なるものとて、己が呑ミ候水源ヲ思ざるもの可有之哉。上の宜敷ケレバ、己も宜、影の形に従ふ如くに御座候」

藩士から中間に至るまで、全員が何とかして殿様のために尽力したい、という気持ちになれば、前記の画論で述べたように、全身が残らず画になりますから、病身の者もそれなりに役割を果たすことができます。病身の者であっても、藩という全体の一部ですから、切り捨てるわけにはいかない存在です。

そうは申しても、中間までも残らず全員が殿様のために尽力するようにはならない、と心配する向きもありますが、「水を引く者は水源を濁さず」という例え話のように、どんな愚か者でも、自分が飲む水の水源の事を心配しない者がいるでしょうか。上位の者が宜しければ、それに倣って自分もよくなる、影が形にそうような道理だからです。

崋山はさらに加えて、藩主や藩士に対して、安易に流れやすい世の風潮に対抗する心得を、次のように説いている。

「風ハ勢ヒに生ジ、勢ヒ一致より出申候。一人悪人有之候得ば、風俗ヲ破り候ハ顕然なる事にて候。然バ善といえども右之通ニ御座あるべく、恐多くも上御一人より御一途ニ御治安被思召候得ば、下ハ破竹の如く御座候。……下たるものも、一、二人道理之相分り候。道理を解シ候而、上ニ合候得ば、跡ハ又破竹之如ニ御座候。若従ざるも、憂ひニ不足候。然ラバ、上下一体、内外一致、即座相定り可申候。其証も至而出シ易かるべし」

世の風潮は、時の勢いから生まれます。時の勢いは、同類多数派の一致した意見から出てきます。一人の悪人が現れると、時の風俗を破るこ

とは明らかです。そうすると、善人の場合も、同様な影響をもたらすでしょう。

恐れ多いことですが、殿様お一人が率先して一途に藩の治安のために尽力されましたら、下の藩士たちは破竹の勢いで殿様に倣って尽力することでしょう。……

藩士の中にも、この道理が分る者が、一、二人居ることでしょう。道理を理解し、殿様と一体になれば、あとは破竹の勢いで人心は一致結束に向かうでしょう。もしも従わない者がいても、少数ですから、心配は無用です。こうして上下一体、内外一致の体制が、即座に定着することでしょう。その効用も、たいへん容易に証明できます。

その後段において崋山は、自分はこのように考えるけれども、今日の諸侯の中でこのような心構えを持つ方がおられるという話は、聞いたことがないと慨嘆した上で、為政者に次のように要望している。

「さすれバ、其職ニ当り、前の並合出来合にて、天下と申大ナル箱、諸侯申す小なる箱、士と申内のシキリ、活物世界を死物にて治メ候世の中ニ御座候故、帳面例書の繁多ナルにても、能ありさまハ相分申候。然ル上ハ、割レ物ハ下の道具ニ遣ふべく、無疵ものハ客前ニ卸シ遣ふべし。病身ものハ、散官へ用、丈夫なるものハ大職ヲ授るがよいと申ものニ可有之候」

今の世の中では、為政者は就任に当たって前例の踏襲を基本方針とし、天下（公儀、幕府）という大きな箱、諸侯という小さな箱、武士という内輪の仕切りに収まることを旨としている。活物世界を死物で治めるような世の中だ、とも言えます。

このことは、前例を収めた帳簿類がやたらに多いことからも、その実態がよく分かります。そうである以上、壊れたものは下座の道具に使うようにし、無疵の物は来客用に卸して使うべきである。病身の者は閑職に割り振り、頑健な者には重職を授けるのがよいということになります。

崋山は以上のように所信を語った後に、今はさし当って老母が天寿を全うできるよう、保養に努めたいので、格別の御仁慈で私の家老職退任をご了承ください、という切実な言葉で、この願書を結んでいる。

この退職願書は、田原藩の同役の年寄（家老）により検討されたが、受理されず、書面は差し戻された。

こうした事のあった天保十年（一八三九）春のころ、崋山は自分の居室の壁に稽叔夜（中国の三国時代、魏の人。竹林の七賢の一人。政治事件に連座して刑死した）が書いた『養生論』の中の次の文言を自書して、糊で張り付け、病中の慰めとした。

「思慮銷其精神、哀楽殃其平粋、夫以蕞爾之躯、攻之者非一途、易竭之身、而内外受敵、身非木石、其能久矣」（思慮はその精神を銷し、哀楽はその平粋を殃す。それ蕞爾之躯を以て、之を攻める者一途に非ず。竭易きの身、而して内外に敵を受け、身は木石に非ず。それよく久しからんや）

思慮がその精神をすり減らし、哀楽の感情がその平静で純粋な本性を損なっている。そもそも人は小さな体なのに、之を攻める者はあれこれたくさん居り、精根が尽き果てやすい身である。しかも、内と外から敵の攻撃を受ける人の体は、木石のように堅固でないから、どうして長い寿命を保つことができようか。

当時の崋山は、虚弱な体で藩の内外から攻撃を受け、〝風前の灯火〟のような心細い心境だったことを物語っている。

この記事に続いて、「五月之初なりけん、水野越州公之臣小田切要助を訪ふ、主人虎尾を履む事を告たりけれども、自ら信ぜず、必ず流言之達したるなるべしとぞ。同五月十四日、町奉行所より留守居同道にて罷出候様御召出相成、即刻罷出候。御尋問之次第有之、揚屋入被仰付、揚屋中にて自書御答書左に」という記事が見られる。いわゆる〝蛮社の獄〟の前夜とその発端のようすを伝えた

記事である。

水野とは時の老中で浜松藩主の水野忠邦であり、小田切とは崋山と松崎慊堂の学塾で同門だった儒学者で、当時は水野の秘書役を務めていた。

小田切は崋山に対して、貴殿の言動は私の主人である水野の逆鱗に触れているようだから、よくよく用心した方がよいと警告したのである。これに対して崋山は、自分としては信用できない、きっと噂話による誤報でしょう、と答えている。

同様の記事は、崋山の手控え書『客坐掌記』の天保十年五月六日にも記されている。しかし、その八日後の十四日には、江戸北町奉行所から藩の江戸屋敷の責任者と共に出頭するよう命ぜられたので、早速出頭した。取り調べの結果、揚屋という武士牢に収容されることになった。その中で受けた尋問により自白し、署名したことが、口書（口述書）に記録された。奉行はその口述書に基づき、上司とも相談して申渡書（判決文）を書くことになったのである。

『全楽堂記伝』は、この後に「口書」と「申渡書」を全文収録しているが、その検討をする前に、「蛮社の獄」がどうして起こったか、崋山がどうして有罪判決を受けるに到ったかを、別の文献資料を使い、少しさかのぼって考察することにしたい。

崋山は巣鴨の三宅友信邸に通って、蘭書の内容を小関三英に解説させたりしていたが、四十歳の時に江戸家老と海防掛に任ぜられたことから、蘭学に本格的に取り組むようになった。外敵に対抗するためには、軍事力の背後にある西欧社会の実態を知る必要を感じたからだ。

西欧の学芸の進歩については、すでに何人かの蘭学者が指摘していたが、崋山はそれを産み出した政治や教育の制度に注目したのである。

オランダ商館長ニーマンの会見に同席した小関三英から聞き出して、崋山がその問答のようすをまとめ、再構成したのが、『鴃舌或問』である。

同書によれば、西欧諸国では、政治の重点を人材養成におき、身分や家格に関わりなく政府が奨学金を支給するので、生計を心配せずに学問・研究に専念できる。研究成果は、一部少数の者に独占させず、大学の審査を経て出版されるため、短期間で多くの人々に普及する。その結果、井戸の中の蛙のような唯我独尊の弊風がなく、万事議論の慣行もあるので、向学心を持つ者が日ごとに増え、科学技術は目ざましく進歩している。

また、西洋人は迷信を排し、現実を直視して、理詰めで自然や社会を探究したからこそ、イギリスやアメリカのように、各種の制度改革に果断に取り組むことができたのである。

例えば、イギリスが商法改革（産業革命）を断行したり、アメリカが独立の際に君主を置かず、「会議共治」（議会制・共和制）の政体を採用したりできた理由も、そこにあると指摘している。

一方、崋山は後述する『慎機論』において、「西洋諸国の道とする所、わが道とする所、道理において一ありて二なし」と説き、道徳の世界普遍性を明らかにし、儒学を世界の五つの教学の一つとして相対化している。これに対して同時期の水戸学派の学者たちは、日本は〝神の国〟という特別の国柄であると力説し、西洋諸国と同格にとらえることを拒否している。〝世界普遍の道理〟の存在を否定する一国中心主義の思想であり、崋山とは正反対の見解である。

とは言え、崋山は西洋諸国をただ肯定的に評価した訳ではなく、西洋諸国が経済的実力を背景に世界の領土の大部分を占領していることを指摘し、わが国も占領される危機が迫っていると警告している。

崋山は「人ヲ重ジ候事、金石ノ如クニ候」と西洋諸国の人命最優先の内政を評価したが、対外政策では非道な「権略ノ政」を強行することに、矛盾を感じていた。西洋諸国の近代的な社会に心魅かれ、その導入を思い描きながらも、植民地化の脅威に備えなければならないことに、崋山の苦悩があったのである。

遺像を描く

田原市博物館 学芸員　鈴木まりな

田原藩の家老であった渡辺崋山は絵を描いており、最も評価が高かったのは肖像画でした。そもそも肖像画は二通りに分ける事ができ、肖像画に描かれた人が存命中に描かれたものが「寿像」、亡くなった人を描いたものが「遺像」といいます。崋山が描いた「遺像」について紹介します。

崋山は人に頼まれて寿像を描く事が多かったのですが、崋山の伝記である『全楽堂記傳』には「人の為二親又ハ子遺肖ヲ描キテ其哀を慰シコト多シ」とあり、遺像も描いていたようです。

通常、遺像を描く場合、すでに肖像画があれば、それを参考に描かれます。それが無いとなると、描き手が故人を思い出しながら描くか、家族などから故人の特徴を聞き出して描くことになります。

崋山には、遺像を描くにあたって興味深い話があります。ある時、崋山は自身が招聘した儒学者の伊藤鳳山から父である鹿鳴の肖像を依頼されました。しかし、すでに鹿鳴は十八年前に亡くなっており、崋山自身も面識がなかったため、最初はこの依頼を断ります。しかし、鳳山に懇願されたため、血縁上似ているところもあるだろうからと鳳山を写して描いたということです。この話から分かるのは、崋山は遺像を描く場合、面識のない人物を描く事を断っていたようです。

崋山が遺像を描いた時のエピソードが残っている作品は、「立原翠軒像」（原本関東大震災にて焼失）、「渡辺巴洲像稿」（田原市博物館蔵）、「滝沢琴嶺像」（個人蔵）です。この3作品のエピソードを追いながら崋山の遺像の描き方を見てゆきます。

重要美術品　渡辺崋山筆　立原翠軒像稿
文政6（1823）年　田原市博物館蔵

まず、文政六（一八二三）年頃に描かれた「立原翠軒像」です。立原翠軒は水戸藩の五代と六代藩主に仕えた人物です。天明六（一七八六）年に彰考館総裁になり、編纂が長く休止していた『大日本史』の編纂を再開させました。この翠軒の息子が杏所で、崋山と親しい間柄であり、崋山が蛮社の獄で捕らわれた時には椿椿山と共に崋山の救済活動を行っています。また、杏所の娘の春沙は崋山を絵の師とし、後年、崋山十哲に挙げられています。

この翠軒が亡くなった時、崋山が杏所の元を訪問した事が、『立原両先生』（一九一五年）という本に記載されています。その内容をまとめると次のようになります。

翠軒が亡くなった時に、崋山が枯相（亡くなった人の顔）をスケッチで描いていった。完成した翠軒の肖像画を見ると、その人らしさがあり、姿についても生きているようであった。翠軒の姿は立派であり眉を上げて人を見る様子であった。高い鼻であり、目は光を放っており、翠軒が目の前にありありと現れる様子で、その人望が絵であっても見えるようで敬意が生まれないことはなかった。この『立原翠軒像』が掛かっていると小さな子供は畏れてその部屋に入れなかった、ということです。

右の記述から分かるのは、崋山が遺体をスケッチし、描かれた肖像が本人によく似ていたということです。

次に「渡辺巴洲像稿」ですが、巴洲とは崋山の父親の定通のことです。定通は元々病気がちで、文政七（一八二四）年八月九日に亡くなりました。この肖像について鈴木進※1は「特に注目される

点は、挿図のごとく、これらの草稿が、遺照（枯相）すなわち死顔から生前の顔に還元されてゆく、珍しい過程がしられることである。」としています。巴洲が亡くなった際、崋山は涙ながらに筆をとって描いたと『全楽堂記傳』に書かれています。「渡辺巴洲像稿」には元となった「渡辺巴洲像稿本」があり、そこには顔の画稿が五枚貼られています。

　左の二枚の画稿は「渡辺巴洲像稿本」に貼られた五枚の内の二枚です。右は枯相のスケッチと思われるもので、左は右の画稿を元に彩色したと思われる着色画です。二つを見比べてみると枯相に比べ、頬や顎などが膨らんでいるのがわかります。そして、〝その人らしさ〟が着色画から見出す事ができます。

2図とも　重要文化財　渡辺崋山筆　渡辺巴洲像稿本
文政７（1824）年　田原市博物館蔵

　次に、「滝沢琴嶺像」です。琴嶺は金子金陵が崋山の師匠であった時の兄弟子で、人気物語作家である曲亭馬琴の息子です。琴嶺が亡くなる前後に関しては馬琴が後世の為に残した『吾佛乃記』『後の為の記』『著作堂雑記抄』に詳しく書かれています。これらの書物の情報を合わせると次のような内容になります。

　琴嶺が危篤状態となった時、馬琴は息子の肖像画を遺すために崋山を呼びました。しかし崋山の都合がつかず馬琴の元を訪れたのは琴嶺が亡くなった後でした。崋山は琴嶺の死を嘆いた後、琴嶺の肖像を描くためのスケッチをとります。琴嶺の棺の蓋を開け、亡骸に触れながら一～二時間で写し、帰り際に「生前に写さないと似ない、骨格は写した」ということを言って帰っていったようです。その後、琴嶺の完成した肖像を見た馬琴は、亡骸を写したので肉がついていなくて骨ばっていて、五・六十歳（故三七歳）くらいの人に見え、琴嶺の姿があるだけだと思ったようです。加えて、この肖像を見た琴嶺の妻は残念に思ったということです。

　琴嶺の肖像は亡骸のような肉付きだったようです。この時、琴嶺の肉体の復元ができなかった理由としては、崋山と琴嶺は亡くなる約一年前に会ったのが最後で頻繁に会っている人物ではありませんでした。なので、琴嶺を知ってはいるものの、元気であった時の姿が覚束ないものであったと思われます。

　崋山が遺像を描くにあたって、崋山は面識のない人物は断っていた事、亡骸に触れながら骨格を写し取った事、そのスケッチを元に生前の姿を蘇らせて描いた事が分かります。絵の評価としては、翠軒については、その人がそこにいるようであったというほどで、琴嶺に関しても、亡くなった時の肉付きで残念だったとするものの琴嶺の有様があるという事なので、似ていたと思われます。崋山の遺像は、表情の乏しい亡くなった人と実際に対面し、そこでとったスケッチから生きている時の肖像を描くという（時間の遡り）をしており、これは大変珍しい描き方です。亡くなっている人物である遺像であっても、遺体からその人らしさやその人の顔に似せることが崋山はできたのです。

※1鈴木進「崋山の肖像画」『MUSEUM』46号、一九五五年

『四州真景の旅』⑩
名品「釜原」

研究会員　中神昌秀

一　序

崋山は、文政八年（一八二五）夏、数え三三の歳、利根川下流域を旅し、スケッチ画入り紀行文『四州真景』を制作します。そのスケッチは真景図と呼ばれ、名品揃いですが、今回はその中でも傑作の呼び声が高い「釜原」を訪ねる旅をしてみたいと思います。

二　「釜原」に関する美術史家の評

東京都庭園美術館名誉館長の鈴木進氏は、『四州真景』を「爽やかな、まるで印象派の水彩画でもみるような近代的な色彩感」と評し、また「江戸時代末期に描かれたものとは思われない程新鮮な、生き生きとした風物の生命を感じとられるであろう。」とし、「釜原」を、この画巻中の白眉と書いています。

東京大学名誉教授の芳賀徹氏は『渡辺崋山優しい旅人』の中で「下総釜原の放牧場のなかの一本道を、親子らしい人物が二人、身も心もかろがろと歩いてゆく。なんと気持ちのよい絵だろう。」と書いています。また、「省略の効いた筆致がよび起こす生命観のみずみずしさ、簡素な彩色にたたえられ情趣のふかさ。ここにはことによくその特質があらわれていて、私たちの愛着を誘うのである。」とも書かれていて、「釜原」を絶賛しています。

三　「釜原」の写生地に広がる放牧場

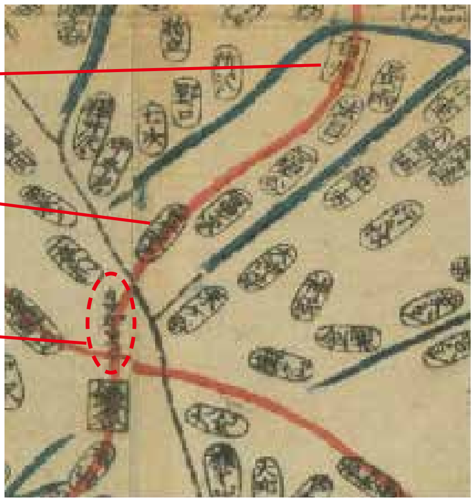
崋山は、旧暦六月二九日、新暦では八月一三日に、江戸麹町半蔵門外の三宅家上屋敷を旅立ちます。日本橋小網町で行徳船を仕立て、下総本行徳河岸（千葉県市川市）へ渡り、そこからは、利根川の木下河岸（印西市）を目指し、木をろし道を徒歩で北上します。途中には、原野が広がり、徳川幕府直轄の牧と呼ばれる馬の放牧場となっていました。幕府は享保七年（一七二二）に諸牧場を整理し、小金五牧と佐倉七牧の体制としました。小金五牧の一つに中野牧があり、その中に、『四州真景』の傑作、「釜原」のモデルとなった鎌ケ谷原があります。なお、鎌ケ谷原は当時、釜原とも呼ばれていたようです。そのため、注記には「釜原」と書かれています。

江戸時代の北総台地の牧　関東農政局HP

四　釈文、古地図と「釜原」の写生地

『四州真景』の行徳からの釈文を読んでみます。そこには「**行徳天晴熱甚　大坂屋書飯八百文　こんにゃく六十四文　行徳ノ堤ヲとふかげと云**」とあり、「行徳の夏空は晴れてとても暑く、大坂屋の昼飯代は八百文、名物のこんにゃくは六四文、行徳の堤を通る道は稲荷木（市川市稲荷木）と言う村にあった。」と書かれています。次の釈文は「**八幡八幡社　總州葛飾郡　法漸寺　享保**」とあり、「總州葛飾郡八幡村（市川市八幡）にある下総国総鎮守葛飾八幡宮と、そこを管理する別当寺の天台宗八幡山法漸寺（明治初年廃寺）を参詣した。」と書かれています。その次は「**八幡宿鬼越フカ町　上山新田南東ノ方藤原新田北西**」とあり、「八幡宿を過ぎ、木下をろし道と房総往還が分岐する鬼越村（市川市鬼越）、深町（市川市高石神）を通った。道中、南東の方角に上山新田（船橋市上山町）、北西には藤原新田（船橋市藤原町）が見えた。」と書かれています。

　そして、鎌ケ谷原に関する釈文になります。「**釜谷宿二里八町鹿嶌屋夕飯三人にて百四文但シ酒一合ニ付二十八文共二　釜谷原放牧原縦四十里、横二里或ハ一里ト云即小金ニ續クトソ**」とあり、「八幡宿から鎌谷宿までの距離は、二里八町（四・八キロ）、釜谷宿の「鹿島屋」で食べた夕飯は三人の代金が百四文、酒一合につき二八文であった、鎌谷原の放牧場は縦が四十里、横が二里或いは一里の面積と言われ、小金原（松戸市小金原）まで続いていた。」と書かれています。釜谷宿の「鹿島屋」は鎌ケ谷市西本田にありました。『房総の街道繁盛記』（一九九九）によれば鎌谷宿には、鹿島屋を含め六軒の宿が有り、明治四〇年頃まで営業し、鹿島屋については業態を変え、今も営業しているとあります。



『富士見十三州輿地全圖』
秋山墨仙 天保14年（1843）国立国会図書館
デジタルコレクション　木をろし道拡大図

　次に「**白井宿逆旅藤屋八右衛門　同宿するものあり。これハ行徳の茶にて邂逅す宿も後前になり終姓ヲ聞椎名内村名主弥右衛門**」と書かれています。崋山は、白井宿まで行き旅籠「藤屋八右衛門」に宿泊します。そこでの同宿者は、行徳の茶屋でも会った、椎名内村（旭市十日市場）名主弥右衛門でした。

　翌日は「**辰刻発白井　鎌谷原印西牧即印旛沼ノ西也　徳本念仏墳右ハ大森左亀成**」とあります。辰の刻（午前八時）に白井宿を出発し、鎌ケ谷原を過ぎると印西牧となり、印旛沼の西に当ります。念仏行者徳本上人（一七八九～一八一八）の石碑があり、道は大森方面と亀成方面に分岐します。右へ行けば、大森の次は木下です。

　以上のように、釈文には「釜原」の写生地やその日時は書いてありません。そこで、釈文の旅程から、日時は、新暦八月一三日午後から一四日午前の間に、場所については、千葉県鎌ケ谷市から白井市にかけてのどこかで、鎌ケ谷原附近を写生したと推定されます。

　次に、古地図による写生地の検討をします。上段左の地図は『富士見十三州輿地全圖』の木をろし道上の鎌ケ谷・白井間を拡大したものです。この地図にカマガヤハラという表記があり、ほぼこの辺りで写生したと考えられます。なお白井宿で宿泊していますので、写生地は最大限この辺りまでかと思います。また、釈文を見ると、崋山は白井も鎌ケ谷原と把握しているようにも解釈できます。

　写生地については、いくつかの説があり、その一つが、『白井の文化遺産史』に書かれている白井市富士地域説です。鎌ケ谷市説などもありますが、これ以上の詳細については、省略することとします。

　その理由としては、作品の背景を探ることは重要ですが、現地のどこが写生地であるのかを正確に解明することは、真景図「釜原」のすばらしさには、あまり影響がないというか、作品の優劣を左右する要素ではないことがあります。また、当時とは地形も変化しており、古道についても当時のルートが現在は、はっきりしない箇所もあり、正確にわりだすことが困難であるという現実的問題もあります。

五　真景図「釜原」

　『四州真景』は、四巻の巻子装、いわゆる巻物となっています。「釜原」は、二之巻の三図になります。二之巻の二図から下総になりますので、三図の「釜原」は下総での二番目に写生した図となります。「釜原」は、江戸時代後期の真景図でありながら、近代の風景画を見ているようでもある、独特な作品です。

　この真景図は、右上に少し小さく、「釜原」という注記が書かれています。画面は低い山並みで上下に仕切られ、上半分は空が、下半分は草原が描かれています。低い山の稜線と、その下の草原とを分ける線は、緩い起伏を描き、特に草原は右肩下がりになっていて、この場所が台

『四州真景』「釜原」　重要文化財　紙本墨画淡彩　13・5×39㎝　　個人蔵

地状であったことが判ります。空と陸の割合は、右端は、ほぼ五対五ですが、左端は林で稜線は隠れているものの、空が六分の四になっていて、これにより横への広がりが表現されています。また低い山並みが遠景を表現し、湾曲した道が、その山並みに向かって吸い込まれていくような描写により、遠近感を出しています。中央の人物の持つ杖や、人物の両側の灌木の墨線は、ちょっと太目の線から始まり鋭く尖ってゆく、崋山らしい線の表現が見られます。

　草原には、放牧された馬が九頭が描かれ、草を食んでいます。湾曲した道の左には大きな栗毛の馬がいます。この一頭だけは、たてがみ、四足動物の腹に特有の中央が垂れ丸みを帯びた肉感、後足の太腿の臀筋や大腿四頭筋の質感が立体的に表現され、丁寧に描かれています。それ以外の馬は、省略された描写で、一部は線だけで表現された馬もあり、極端に省略されたものもあります。道の右手の馬は、青色に着色されています。『佐倉牧における野馬の生産と生態』の資料によれば、佐倉牧では青毛は、栗毛の次に多い色でしたので、中野牧の青毛の馬も写実的に描かれたものでしょう。なお、自然放牧されていた馬は野馬と呼ばれる日本の固有種です。

　中央の湾曲した道には、放牧地の見回りなのか、菅笠を被って杖を突く大人と、子供らしき二人が歩く姿が見えます。『四州真景』は崋山が父親を亡くした翌年に描かれたものですが、釜原の草原を行く二人連れは、崋山の幼い頃の父との想い出を回想しているようにも見えます。崋山は、病死した父への喪失感を引きずる一方で、看病が終り、家計の負担も緩和された安堵もあったでしょう。この真景図には、父の病に煩わされていた日々から離れた、崋山の解放感も感じられます。

　さて、崋山が鎌ケ谷原を写生した日は盛夏で、直線距離で約二〇キロ離れた行徳も猛暑であり、鎌ケ谷原も日差しが照り付け、蝉時雨が降り注ぐ中、夏草の草いきれでむせ返るような場所であったでしょう。しかし、「釜原」は、全体に淡い緑の色調で、草原の広々とした風景が、盛夏を意識させない、どちらかといえば爽やかに、描かれています。この図の緑は、崋山の、特に『四州真景』に見られる特徴的な色です。この淡い緑こそが、単に、草原を表現しただけではなく、郷愁を誘う癒しの色として心に訴えるものがあり、「釜原」が名品と言われる所以の一つではないでしょうか。そして、癒しこそが、崋山がこの旅に求めたものでもあったと思います。

　『四州真景』「釜原」は、二之巻の三図になりますが、二之巻の五図に「滑川観音」という注記の真景図があります。この図は、津宮（香取市）に向け利根川を下る木下茶舟から、丘の上の滑川観音（成田市滑河　天台宗滑河山龍正院）を見上げるという構図です。この図について、常葉美術館名誉館長で崋山絵画研究の大家である菅沼貞三氏は『崋山の研究』の中で、「滑川沿岸の風致は、淡薄の草の汁を彩した丘上に」と書

いています。これは、淡く薄い草の汁を絵具として、丘の上を着色したという意味です。菅沼氏は『四州真景』の出色のものは、滑川の景地と新町大手の實景と書いていて、「釜原」については言及がありません。しかし、「釜原」の淡い緑についても、「滑川観音」と同じように草の汁を使用したのではないでしょうか。それだけでなく、二之巻の四図「利刀　常州　十里」に描かれた利根川の土手の着色も同じ可能性があると思います。二之巻の三から五図に使われている淡い緑は、とてもよく似た色で、他の図の淡い緑とも微妙に異なるように見えます。

　真景図とは、風景の写実的表現を指向するものですが、そこに塗られた色は、草そのものであり、『四州真景』を象徴するにふさわしい色であるだけでなく、究極の写実であり、真景図の真髄と言ってもよいと考えます。

　ところで、この図は盛夏に描かれたにもかかわらず、なぜこんなにも爽やかなのでしょうか。草の汁を使用した淡い緑によって爽やかさが増したということはあるにしても、それだけではなく、崋山自身、その風景を爽やかに感じていたのは間違いないと思います。しかし、その理由は明確ではなく推測するしかありません。

　それは、白井宿に宿泊した翌日、午前八時頃に出発するのですが、出発してすぐの、朝の風景を写生したと考えれば、多少とも爽やかさとの整合性が取れるのではないでしょうか。位置について、正確には釜ケ谷原を外れていたかもしれませんが、釜原と言えなくはないでしょう。

　盛夏とは言え、朝はまだ爽やかさがあり、また、一晩寝て、旅の疲れもとれ、心にも余裕も出てきたであろう時です。そして、当時の江戸は、パリ、ロンドンと並ぶ世界的大都会でしたが、その喧騒の中で暮らしていた崋山にとって、朝の鎌ケ谷原を改めて見ると、眼前に広がる原野は、江戸では見たこともない、牧歌的で自然豊かな世界であったはずです。それは、驚くべきもので、その爽やかで、癒される風景は、崋山の心を捉え、傑作「釜原」が生まれ、『四州真景』を代表する旅の作品へと結実したのです。

六　本物を見る大切さ

　本物を見る大切さについて、芳賀徹氏が『渡辺崋山優しい旅人』の巻末の菅沼氏との対談を引用し、一例として説明をします。「**菅沼**　複製ではだめですね。**芳賀**　色が浅くなりますね。元の作品では紙に色がしみ込んだ感じが何とも言えないものですから。」と述べています。絵具の色だけに限らず、紙にしみ込んで変化した微妙な色の風合いまでは、印刷では表現がしきれないのです。また、「滑川観音」の「淡薄の草の汁を彩した丘」についても、草の汁による彩色は、印刷インクでは復元できない、あり得ない色です。カンバスや紙の上に表現された色は、世界に一つだけのものなのです。そうであるからこそ、本物を見る意義、重要性があるのです。

七　終わりに

「釜原」は、崋山絵画の中で最も好きな作品です。しかし、この真景図の魅力を言葉だけで語ることは不可能に近い作業です。

　絵画全般についても言えることですが、ぜひ本物を自身の目で見て、色も含め、作品のすばらしさを、直接感じて頂きたいと思います。それによって、新鮮で瑞々しい崋山絵画の世界を発見することと思います。

参考文献

馬の博物館研究紀要第二二号「佐倉牧における野馬の生産と生態」金澤真嗣
国史跡下総小金中野牧保存整備基本設計（案）鎌ケ谷市教育委員会
白井市郷土資料館　開館二〇周年記念企画展「歴史をひもとく資料たち」図録
「たいわ　―語り伝える白井の歴史―」　白井市郷土史の会

※連載中、一度紹介した文献は紹介を省略します。

※掲載の『四州真景』「釜原」は、原本から撮影した画像を使用しています。許可下さった所蔵者様に、深く感謝申し上げます。

「少年物語　渡辺崋山」読書感想文について

公益財団法人崋山会では、郷土の偉人渡辺崋山先生の功績を後世に伝承する事業の一環として、毎年市内小学六年生に対し、「少年物語　渡辺崋山」の冊子をプレゼントしてまいりました。感想文の募集を行ったところ、三一七点の応募をいただき最終選考において選ばれた二五点の中から優秀賞五点と嚶鳴協議会長賞一点の作品をご紹介させていただきます。

　応募いただきました学童の皆さんやご協力をいただきました各学校の先生方に厚くお礼申し上げます。

公益財団法人崋山会事務局

優秀賞

渡辺崋山先生から学んだこと

若戸小学校　六年　**浅倉　佑香**

『大功は緩にあり機会は急にありということを忘するなかれ』これは、崋山先生の「八勿の訓戒」の一つであり、『大きな手がらはゆっくり積み立ててゆくが、チャンスは急に来るからすぐとらえねばならぬ』という意味です。この言葉を見たとき、わたしはとても考えさせられました。

　わたしは、つらいことがあるとすぐに、「無理。できない。」と言ってあきらめてしまいます。例えば、算数で難しい問題が出たとき、最初はがんばって解こうとしますが、解けないとすぐにあきらめてしまうことがあります。また、勉強をしていても、集中力が続かずにねころんだり遊んだりしてしまいます。しかし崋山先生は、幼いころからあきらめずに勉強したり、位の高い人にも負けないように志を立てて目標に向かってがんばったりする姿がありました。わたしは、好きなことや楽しいことの目標は全力でがんばれますが、きらいなことや苦手なことは、さぼったりがんばることができなかったりします。その時は、崋山先生の言葉を思い出し、自分に負けないようにしたいと思いました。さらに、崋山先生は自分のことだけでなく、自分をぎせいにしてでも周りの人のことを考えて行動していました。わたしはよく、自分のことばかりになってしまい、あまり周りを見ることができません。自分が楽しいと、周りのことを気にすることができなくなってしまいます。また、友達と自分の意見が合わないときには、自分の意見を友達におしつけてしまうことがよくありました。しかし、崋山先生はいつも家族や田原の領民のことを考え行動していました。そして、自害する最後まで、自分を苦しい立場においこんだ人たちに対してもうらみの思いはなく、その逆に、自分のせいで迷惑をかけてしまった人や家族を心配していたと知ってびっくりしました。そんな崋山先生だからこそ、みんなのたよりになる存在として、今の田原に受け継がれているのだと思いました。わたしは、自分が中心になってしまうことがよくありますが、崋山先生のように周りのことを思った行動をしていきたいと思いました。

　崋山先生のことを学んで、すごいと思ったことがたくさんありました。同時に、自分と崋山先生を比べて、自分に対して気付くこともたくさんありました。崋山先生の教えや生き方をすべて実行することは難しいかもしれませんが、一つ一つ自分が出来そうなことに挑戦していきたいと思います。これから、逃げ出したくなったときや、辛くなったときには、崋山先生の『大功に緩にあり機会は急にありということを忘するなかれ』の言葉を忘れず、毎日の生活の中であきらめずにこつこつがんばって積み立てていくこと、そして、周りの人に優しく接することを大切にしていきたいです。

田原の英雄

高松小学校　六年　**古田　那南**

　崋山先生が生まれた家は、裕福な家ではありませんでした。しかも兄弟が八人もいて、食べ物も十分に食べることができなかったそうです。だから、渡

辺家の長男として家族を支えるために、自分の絵を売ったり、弟や妹を奉公に出したりしていました。兄弟と別れるのは、とてもつらかったと思います。

崋山先生が十二歳の時、との様の行列とぶつかったことがあります。その時、お父さんの名前を聞かれても、お父さんに迷惑が掛からないように、殴られても絶対に言いませんでした。そして、みんなが平等な世界をつくりたいと心に決めました。そのために、貧しい生活の中で、どうやったらもっと勉強ができるか考えて工夫し、努力していきました。

崋山先生はどんなに貧しくても、どんなにつらくても弱音をはかず、自分が決めたことをやり通していました。私が住む高松には、近藤寿市郎という人がいます。寿市郎さんは周りの人に反対され、バカにされても豊川用水の必要性をうったえてきた人です。寿市郎さんのおかげで田原市は、豊川用水が通り、農業大国となることができました。寿市郎さんと崋山先生の姿から、何かをやりとげるためには、強い意志と強い心が必要なのだと思いました。私には、医者になりたいという夢があります。そのために、勉強をたくさんしなければいけないことは、わかっています。でも、ついつい後でいいかとあまい心が出てしまいます。崋山先生のように、強い意志と心をもって、これからも夢に向かって勉強をがんばっていきたいです。

私は、この本を読むまで崋山先生のことをしりませんでした。崋山先生は、食りょう不足で困っている田原に報民倉という建物を作って、田原の危機を救った人でした。崋山先生がいなかったら、田原には食べ物がなくなって、人々もいなくなってしまい、今の田原は存在しなかったかもしれません。自分のことよりも田原の人のことを考えていた崋山先生の姿から、私もそういう医者になりたいと思いました。患者さんのことを思いやり、優しくできて、みんなにしたわれる医者になって、たくさんの人の命を救っていきたいです。

崋山先生は、今の田原を作った英雄です。そんな崋山先生がいた田原に生まれ育ったことをほこりに思います。そして、田原の町がもっと好きになりました。崋山先生が大切に思っていた田原をもっといい町にして、田原のいいところをたくさんの人に知ってもらえるようにしていきたいです。

崋山先生みたいな大人になりたい

田原中部小学校　六年　粕谷怜亜

私たちの学校には、崋山先生が十二才の時に大名行列にぶつかってしまい、らん暴されて倒れた時に、同じ年くらいの若君様を見て崋山先生が、志を立てた時の姿の銅像があります。その銅像の横には、「見よや春　大地も亨す地虫さへ」という崋山先生がよんだ俳句もあります。私は、その意味が気になっていました。この本を読んで、初めて意味を知ることができました。その意味は、「地虫のような小さい虫でも、わきめもふらずに熱心に努力をしたら、最後には、固い大地をつきぬいてしまうではないか。つらい冬が過ぎれば、楽しい春がくるように、今に私達にも思い通りにできるよい時代がくるのだ。」という意味でした。

私達が生きている今の時代は、暮らしが貧しくて家族が離れ離れで生活をしなければ生活できないという事はないと思うし、私の場合は、家族と共に生活するのが当たり前で、自分の好きな事をし、わがままを言ったり、兄とけんかをしたり、お母さんに「宿題終わったの。」と言われてから宿題をしています。そう考えると、崋山先生は、自分で考えて行動できるところがすばらしいと思いました。

崋山先生は、いつもあの日の日本橋での悲しい出来事を思い起こし、少しの時間もおしまずにものすごく勉強をされたそうです。貧しくて弟や妹達と生き別れて暮らさないといけなかった事や、病気がちのお父さんのために、自分で勉強した絵を売って薬代をかせいだりしていたので、同じ十二才でそこまで考えられる事が、すごいと思いました。私なら、きっと何もできずに泣いてあきらめてしまいそうです。崋山先生は、自分がお兄ちゃんだから家族を守ることが当たり前だ、もっと小さい弟や妹が両親と暮らせなくなってしまうから余計にがんばらないといけないと考えたのかもしれません。本当に強い気持ちを持った立派な方だと思います。

崋山先生は、絵の勉強をしたり、外国の文学についても興味を持ったり、政治の事も熱心に考えて、常に先のことを考えて行動し、大勢の人達を助ける人になりました。

「天保のききん」では、「報民倉」を作り死者を一人も出さずにのりこえました。これは、全国でゆい一のことでした。そして、現在も校区に報民倉が復活し、非常時の備えがされています。このことから、今ならどのくらい有名人になったか知りたいくらいです。

私は今、バスケットボール部活をがんばっています。崋山先生が、絵を一生懸命勉強したように、私も努力をして練習をやりぬき、その後には、自分の思うようなプレーができるようになりたいです。崋山先生の志と違うかもしれないけれど、私も志を立てて、崋山先生のように、周りの人のことを考えて周りを手助けができる大人になりたいです。

少年物語　渡辺崋山を読んで

中山小学校　六年　清田莉音

　私はこの本を読むまで、渡辺崋山先生のことは名前を聞いたことがあるだけの人でした。こんなにも一生けん命生きた人、人のために苦ろうした人ははじめて知りました。田原で最後の時を過ごした事を知りとても身近に感じ、私が小さなころに母が散歩で池ノ原公園に連れていってくれたことを思い出しました。渡辺崋山先生が晩年を暮らした屋敷跡を見に行きました。何も知らない私は、その時何も感じなかったけれど、今はとてもむねが熱くなります。あの屋敷で自らの命を絶ってしまったなんて。蛮社の獄の内容を読んでとてもくやしい気持ちになりました。世の中には人をねたましく思うのはつきものです。でも罪をおかしていないのに、牢屋に七ヶ月も入り、皮ふ病にもなり、おなかの具合も悪くなってしまいました。死刑にはならなかったけれど、田原で、ちっ居といい、罪人として家にとじこもってつつしむことになり、田原へ移動する時に、寒さとすい弱のため、とうとう気ぜつしてしまいました。東京から運ぶ方も、かごにのっている崋山先生も八日間の移動は、すごく大変だったと思います。気ぜつするほどの苦しみは、とてもかわいそうに思えました。

　田原に来てから崋山先生は、絵を書いてくらしました。母と妻と子どもとくらせた日々は、少しでも落ちつけ、笑顔だった日はあったのでしょうか。罪人という立場で苦しい日々だったと思うと、あの時代の町奉行という仕事をしていた人にたいして、もっとしっかり考えてほしかったし、本当に悪いことをしたのかとぎ問に思います。

　崋山先生のおかげで町の人たちが救われた話で、心に残っているところは、報民倉といってお倉をたてた話です。百姓があるからこそ殿様があるので、殿様があるから百姓があるのではありません。という考えを読んで、農民をとても大切に思っていてすばらしい人だと思いました。田原藩では崋山先生のおかげで、お米にこまることはなかったそうです。今でも、倉のある家を見ます。頑丈な倉は大事な物が入っており、テレビでは、お宝発見シーンも見ます。報倉民で役に立ち、人々の家にも倉をたてるようになったのでしょうか。崋山先生の教えが今も受けつがれて見れること、また田原城跡、田原市博物館にも崋山先生の関係資料や、数々の文化財や史跡があるので、今まであまり興味はなかったけれど、見に行きたいと思います。崋山先生と田原藩の歴史をしっかり学びたいです。こんな立派な人が田原にいたことをとてもほこりに思います。これから辛いことがあっても、崋山先生を思い出し、努力したいです。崋山先生のように人が困っている時には、自分のことのように同情し、自分に対するうわさや悪口については平気でいられるように強くなりたいです。日省課目のようにはいきませんが、私も早起きして一日を力いっぱい過ごせるようになりたいと強く思いました。

「少年物語渡辺崋山」から学んだこと

田原中部小学校　六年　北　陽葵

　私がこの作文を書こうと思った理由は、私が読んで感じた事や学んだ事を誰かに伝える事ができるかもしれないと考えたからです。この本は、郷土の偉人である渡辺崋山先生の生がいが書かれていました。崋山先生は、明治以前の国を閉ざした暗い世の中に、新しい時代の夜明けを願い、命がけで考えぬいた人です。崋山先生は、小さい時から貧しい家庭で大変苦労して育ちました。それでも、たゆまずくじけず、親によくつかえて勉強に励んで立派な人格をつくり上げました。先生は、優れた知識と芸術をもって各方面で活やくされたのに、無実の罪に問われ、日本の将来を考えながら田原の地で自刃されました。

　私が、この本を読んで一番心に残ったところは、崋山先生を心よく思っていない人達のよくないうわさによって、家族や、殿様や、たくさんの友など崋山先生に関係がある人達がとばっちりをうけてしまうおそれから、崋山先生が、遺書を認めた後に池ノ原邸の物置で武士らしく腹を切り、自らのどへとどめをさしてしまった場面です。私は、この場面を読んで、崋山先生は、周りの人のことを常によく考えて行動し、周りの人のためになら自ら命を絶つことができる自分より周りの人を優先する考えをもつ方だったのだなと思いました。江戸時代でも現代でも、崋山先生のような考えの人は、あまり多くはないと思います。なぜなら、自分の幸せの方が大切だと考える人がたくさんいるからです。別にその考えも悪くはないと思います。なぜなら、他人の幸せのために自分が不幸になるのは、良い選択だと思えないからです。

　話がそれてしまいましたが、もし、私が、崋山先生と同じような状況だったなら、崋山先生のような行動ができず、誰かからの助けを待つことしかできないだろうと思います。

　そう考えると、崋山先生は、全ての責任を背負い、後に残される家族に対しては、わびの言葉を残し、

親しい友人達に対しては、わびの言葉と残していく家族のことを頼んだ遺書を残してこの世を去っていかれた事は、なかなかできないことだと思うので、心が広く、尊敬するべき人物だと感じました。
　私は、この物語から、何事にもくじけず一生懸命に取り組めば、いつかきっと良い結果が得られるはずだということを学びました。だからこれからも、何事にも一生懸命に取り組み、やってよかったなと思えるようにしていきたいです。そのために、これからの勉強や行事、係、委員会などに対しても、もっと責任をもち一生懸命に取り組み、少しでも多くの人にねぎらいの言葉をかけてもらえるようになる事を目標に、何事にも一生懸命に生きて、一生懸命に取り組んで過ごしていこうと思います。
　そしていつか私も、崋山先生のような立派な人物になりたいと思いました。

嚶鳴協議会長賞

「渡辺崋山」と「私」

大草小学校　六年　鈴木愛央

　私は、この本を読んで、私と渡辺崋山は、大ちがいだなぁと思いました。なぜかというと、渡辺崋山は、家族のため、田原の人々のために、身を粉にして働き、努力しました。私は小学生だから、働くことはできないけど、努力なら、いくらでもできます。それなのに、私はひとのためになる努力や、行動を、一つもしてきませんでした。
　私は、『渡辺崋山』を読んで、崋山は人間の鏡だなぁと思いました。崋山は、当時なら他の人が思いつかないような発想を思いつき、それを実行しています。他の人が考えないような発想が出るのは良いとして、それをすぐに実行できるのがすごいと思います。私は頭で「これやらなきゃ、あれやらなきゃ」っていうのは考えるけど、行動に移すことができません。それに、私がやろうと思いつくものは、自分のためのものです。決してひとのためにはなりません。でも崋山がやろうと思うものは、人々のため、家族のため、そして世の中の理不尽に対してです。私のような、自己満足のためではありません。崋山は、自分の頭がいいという才能を、ひとのために使っています。特に、食料保管庫を作って、田原の人々を一人も死なせなかった時は、「すごい！」とおどろきました。田原の人々は、崋山にとても感謝していると思います。
　私はこれといった才能はないけれど、将来、自分の才能と呼べるものを見つけることができたら、その才能を、ひとのために使って、人から感謝されるような人間になりたいです。
　崋山には、絵の才能もありました。先生に崋山が描いた絵を見せてもらった時は、「わぁ、すごいなぁ」と、心の中で思いました。私も絵を描くのが好きです。でも崋山とは絵のジャンルがちがいます。ですが、背景の描き方や、服のしわの描き方とか、すごく上手なので、尊敬します。私も絵が上手にかけるようになりたいです。
　崋山は、最期まで親戚や弟子、家族のことを考えていました。めいわくをかけるから自害したというのは分かります。でも、親戚や、家族一人ひとりに手紙を書くなんて、いくらなんでも大変すぎると思います。私だったら、一枚の遺書にまとめて親戚や家族に遺言を残すと思います。一人ひとりになんて、たぶんめんどくさくて書かないです。
　でも、崋山は書きました。一人ひとり。本当に優しくて、親戚思いで、家族思いだと思います。
　崋山は、努力を積み重ね、家族のため、田原の人々のためにたくさん努力して、がんばってきました。私が崋山のようなすてきな人間になるには、まだまだ全然、努力が足りないと思います。なので、たくさん努力して、田原じゃなく、まずは家族のために、家族のみんなが喜ぶようなことをやりたいと思います。

最終選考に選ばれた方々

松尾海晴　鈴木衣織　田中詩乃
伊藤沙耶　池田紗梨　壁谷茜季
渥美開浬　小野田はなの　佐藤瑛太
八木篤志　鈴木千佳　馬渕虎太朗
井本有咲　杉浦蓮緒奈　川口紗空
川口智己　杉浦愛都　山内雅仁
藤井美緒

（受賞された方は除く）

公益財団法人崋山会　田原市博物館 からご案内

偉人物語「渡辺崋山」発行

崋山会では、田原市の郷土の偉人として知られる渡辺崋山の少年物語第9版の稿をもとに偉人物語「渡辺崋山」を発行いたしました。

貧しかった幼少の頃から志を立て、その後田原藩士・画家・洋学者として活躍した崋山の生涯をわかりやすく紹介し、崋山のすばらしい人間性に触れることができる一冊となっております。

崋山会、田原市博物館にて定価八百円(税込)で販売します。

田原市博物館企画展のご案内

～十一月二十八日(日)

企画展

日本ボタニカルアートの巨星
太田洋愛展（企画展示室）

田原市出身で日本を代表する植物画家であった太田洋愛の作品を展示します。

火打谷菊桜（国立科学博物館蔵）

同時開催：崋椿系から見る草花（特別展示室）

渡辺崋山の弟子の椿椿山、崋山の子の小華を中心に、樹木や草花を描いた作品を展示します。

田原市博物館平常展のご案内

十二月四日（土）～令和四年二月六日（日）

常設展示

渥美半島の歴史（企画展示室２）

渥美半島の2万年の歴史を、特徴的ないくつかの切り口からひもときます。

崋椿系の四季（特別展示室）

崋椿系の画家が描く花、植物及び風景から四季を感じられる作品を展示します。

二月十一日(金・祝)～四月十日(日)

ひな人形と初凧展（企画展示室１）

田原の旧家に伝わったひな人形や田原凧保存会作成の初凧を展示します。

同時開催：文人画から見る中国を題材とした人物画・風景画（特別展示室）

中国の故事、風景及び関羽等の人物を描いた作品を中心に展示します。

渡辺崋山筆「亀台金母図」

観覧料

企画展開催時
一　般　六〇〇円(四八〇円)
小中学生　三〇〇円(二四〇円)

平常展
一　般　三一〇円(二四〇円)
小中学生　一五〇円(一二〇円)

（　）内は二十人以上の団体料金

東三河在住の方は小中学生はほの国こどもパスポートもご利用ください(呈示により無料入館)。

渥美郷土資料館は無料

休館日　毎週月曜日（祝日の場合はその翌日）、展示替日、十二月二十八日～一月四日

崋山会報　第四十七号
令和三年十一月十一日発行
編集発行　公益財団法人崋山会
理事長　鈴木　愿
常務理事　林　勇夫
事務局長　大根義久
〒四四一―三四二一
愛知県田原市田原町巴江一一の一
TEL〇五三一・二二・一七〇〇
FAX〇五三一・二二・一七〇一

編集協力
田原市博物館
崋山・史学研究会
会長　小林一弘

※崋山会報ご希望の方は崋山会館・田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定　令和四年四月十一日